

ボリビア・カマルゴの日食

木村 直人

ボリビア・サンタクルスを飛び立つと、景色は一面に広がる雲海のみだった。そろそろ到着地のタリファが近づく頃、突然、山々が見えてきた。アンデス山脈だ。見る見るうちに山脈が目前に迫ってくる。おそらく、4000mを軽く越す山々なのだろう。その山脈を跨ぐと、なんと快晴である。まさに馬の背を分けた天候だ。

○ カマルゴへ

快晴率が高く、高山病の心配が無く、宿が確保できる場所、という条件で観測地を探した結果、ボリビアの標高2400mにあるカマルゴを選んだ。飛行機で日本からアメリカ経由でタリファまで、その後は約5時間のバス旅行でカマルゴに到着するという。

10月31日午後1時、タリファに到着した。ドライな空気に触れ、快適さと日食の天候が保証されたようで、たいへん気持ちよかった。東方には、屏風のように山脈が連なり、その向こうに雲が盛り上がって見えている。しかし、その雲は山脈を越えられないようだ。この飛行機には、カマルゴを目指す観測隊が3チーム同乗していた。いずれも日本からで、小池さんを中心とした約20名と別の約20名、そして我々の自主グループ12名である。空港には想像以上に立派なバスの迎えが来ており、それぞれ散って行った。

我々はタリファの町を見学し、ここで1泊した。タリファは、タリファ州タリファ市の市庁舎があり、この地方の中心地であることを知った。町に入ると日本車が目につき、しかも「*印乳業」などと車体に書いてあり、日本の中古車がそのまま使われている。街づくりは、石畳の道路に塗り壁の洋館が連なり、清潔で立派なものには驚かされた。皆はスペインの田舎のようだというので、きっとそうなのであろう。

11月1日、観測地へバスで向かう。標高2000mのタリファの町はあっという間に通り過ぎ、道は高地へと延びる。ここらの山は、山頂がハッキリせず、日本でいう巨大な丘である。道は幾つかの丘を越え、高度計の目盛りは最大3700mを示した。景色は、一面の瓦礫の山だったり、メキシコにあるようなサボテンがよきによきと生えていたり、高原というよりは礫砂漠という感じだ。灼熱の太陽の下、予定通り約5時間でカマルゴの町に到着した。

○ カマルゴの町

途中の町からからは想像できないほど立派な町だ。やはり、スペイン風という街づくりで、中心部には立派すぎる教会と、独立戦争の時に活躍したカマルゴ戦士の銅像が立っていた。

2泊する宿は、部屋数が6つのこじんまりとしたもので、部屋にはベッドと机があるだけの簡単な作りだ。シャワーとトイレは共同のものが庭にある。日本では、ちょっとお目にかかれない宿だが、それなりに居心地はよかった。2名ほどお腹をこわし、日本から持参したお粥のレトルトパックを温めてもらったら、次の食事の時にはそれを真似てお粥を作ってくれた。ところが、塩からくてしょうがない。その旨を伝えると、すぐ作り直してくれた。こんどは水分

が不足でバサバサだ。すると、また作り直してくれて、ようやくお粥もどきのものができた。このような心遣いが、宿でも町でも感じられ、とてもうれしかった。

○ 観測地

11月2日は、観測地を決めなくてはならない。カマルゴの町は皆既帯の中心線から約24km南に位置している。道を北上すれば、どこかで中心線を跨ぐはずである。ところが谷間の道になるので、開けた場所が少ないという。走り始めると、道は断崖絶壁をウネウネと登っていき、スリル満点である。開けた場所を見つけては車を止め、調査をした。この時、GPSを持参していたので大いに助かった。経緯度がたちどころに分かり、中心線に対して自分たちが何処にいるがよく分かる。結局、町から50分ほど移動した所に、見晴らしがよく、石畳が敷いてある広い場所を見つけた。石畳は、望遠鏡をセットするには絶好の場所である。これは確かに大正解で、実際にも望遠鏡の極軸は最後までピタリ合っていた。位置は、西経65度8分16秒、南緯20度31分17秒、標高2950mである。散々苦勞して地主を捜し出し、使用許可をもらった。

○ 皆既日食

11月3日午前2時、先発隊が出発。夜間走行のためにスピードダウンし、観測地の到着は3時15分だった。夜中にアルゼンチンからバス数台を連ねて日食観光団が来たという情報が入った。観測場所を取られたらどうしようと心配したが、何事もなかった。夜明けまでに1時間半、慌てて望遠鏡のセッティングに入る。久々に見る天の南極は、どうも見にくい。と、思いつつセットを終え、夜明けの変化を楽しむ。なんと、薄雲があるではないか。あたりが暗く、雲がまったく見えず、極軸のセットは薄雲を通して見ていたのだ。

7時15分、後発隊が到着。7時21分、第1接触。相変わらず薄雲がある。ほぼ予報通り欠け始めたようだ。雲はかなり薄くなり筋状になった。このままでは、薄雲の上には出そうもないが、絶望的でもない。ひたすら運を祈るのみ。8時15分、皆既10分前というコマンドーの声に、緊張が走る。高地に居るために呼吸が苦しく、直ぐに息切れがする。気がせいて、カメラ等の点検に時間がかかる。突然、鳥がやかましく鳴きはじめてのが、印象に残る。

第2接触が近づいてくると、興奮してきて、呼吸が苦しい。オッ、金星が見えるぞ！西から本影錐が太陽に近づくのが見える。ヤヤッ、コロナが見え始めた。ダイヤモンドリングだ！シャッターをひたすら切る。第2接触は8時25分13秒ごろ。コロナが小さい。小笠原沖の時と比べ、半分くらいか？東西に延びる流線が東に1本、西に3本見える。おっと、食の最大の頃かな、写真を・・・。アッという間に3分が過ぎ、ダイヤモンドリングが始まる。第3接触は28分18秒位か？

今回の印象は、コロナが小さいことだ。皆既中は、辺りはかなり暗くなったという印象を持った。懐中電灯がないと、カメラの目盛り等は全く見えなかった。皆既中に、金星と木星、水星とスピカがよく見えていた。

たまたま皆既中は、心配した筋状の雲の隙間に太陽が入り、ほとんど快晴の状態で見られた。これは誠に幸運としか言いようがない。見られれば最高！ 日食バンザイ！